

目的 現代日本の郡部居住老人は、人生体験上のどのような出来事を幸・不幸として認知しているか。その内容と時期について明らかにする。

方法 神奈川県の小田原市北に隣接する大井町の平野部2地区山間部2地区に居住する65歳以上の老人を対象として、個別訪問面接調査を行い、分析可能者356名(男154名、女202名)を得た。回収率79.3%。

結果 対象者に人生で「もっともうれしかったこと」「もっとも悲しかったこと」およびそれぞれの時期についてたずねたところ次のような結果が得られた。Ⅰ「うれしかったこと」で多数を占めたのは、①子供②その他③仕事であり、「悲しかったこと」では、①戦争②配偶者③その他である。Ⅱ時期については、「うれしかったこと」のあった時期は、結婚後子育て終了までがもっとも多く、続いて老年期、子育てが終るところから老年期までという順序である。これは、内閣総理大臣官房老人対策室「老人の生活と意識に関する国際比較調査」(1981)の日本についての結果と大きく隔たっている。「悲しかったこと」のあった時期についても、本調査では、①結婚後子育て終了まで②老年期③青年時代という結果となり、国際比較調査結果とは一致しない。Ⅲ内容、時期ともに、性別による差がみられた。しかし、年齢・地域・学歴など他の属性による差は顕著ではない。